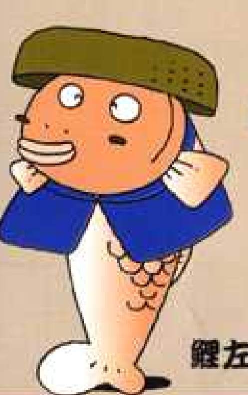


# 己斐 ぶらり旅絵図

みんなコイコイ

## ～己斐の歴史散歩道～

※この歴史マップに記載されている解説文は史料「芸藩通志」及び己斐の歴史研究会の研究資料に基づいています。

## 己斐の歴史

### 「己斐」の名の由来

「芸藩通志」作成に際し、浅野藩が編纂資料として、佐伯郡己斐村より提出させた「国郡志御用ニ付下調書出帳」の中に旭山氏神八幡社の縁起の記載があり、それによると昔、神功皇后へ当時の県主が鯉を奉り、喜ばれた皇后が「鯉」「鯉」といわれたことから「コイムラ」となったという説があり、左の絵はその情景をあらわしたものである。また、他方では、己斐の地形が三方を山に囲まれた地形であることから、谷間を昔は「峡」（カヒ（イ））と云い、この地の地形に合致することから初めは「峡」（カヒ（イ））と呼んだものが、次第に「コイ」に転訛したものであろうと推察される説もある。「芸藩通志」とは、寛文3年（1663）黒川道祐編纂の「芸備国郡志」を浅野斉賢の命により、頼杏坪等が文政2年（1819）各村から提出された「国郡志御用ニ付下調書出帳」に基き改訂し、文政8年（1825）「芸藩通志」として編纂完成させたもので、地誌・歴史を記している。

### 副都心としての「己斐」

政令指定都市・広島の都心部から西へ約2キロの地にあり、太田川放水路右岸に沿い、北と東西の三方を山に囲まれ、南に開け中央平地部を水の澄む八幡川が流れる静寂で緑風の薫る理想の居住区である。昔は、厳島神社の神領となり栄え、それ故、尼子・武田・大内氏争奪の地となり、岩原・平原・立石・柚ノ木の諸城跡が今も姿を留めている。現代の町の平地にはJR山陽本線の「西広島駅」を基点に商店が軒を連ね、市内路面電車・広電宮島線の起点・広電西広島駅を初め、市内・郊外各方面への路線バスの発着所、旧山陽道・宮島街道等が集中し、まさに陸上交通のハブ・ステーションの役割を担い、都心部への西の玄関口となり、人口3万人を擁する。旧山陽道は有名な己斐地区の剪定された松並木を失ったが、今なお健在で、主要な生活路であり、地域の南端をほぼ東西に走り、「源左衛門橋」、「別れの茶屋」など古名を留めている。

### 先覚者と地場産業

古くは勧学まで登った高僧・僧鎧を生み、明治維新に先駆けて郷土子弟の教育に献身した吉村斐山父子、私財を投じて私塾・私学校を開設した土井百穀、終身学校教育に尽力した上野旭峯、子女に英語教育を奨める砂本貞吉等先覚者諸氏を輩出し、地方教育の普及向上に多大な成果を挙げた。またこのほか浅野藩主広島城入府以来、これに従ってきた植木屋次郎右衛門は花卉の栽培地を己斐に見つけ、盆栽・造園等の創造育成に努め、地場産業として定着させてきたため、類まれな植木の町「己斐」として発展を遂げている。

## 己斐案内地図

### 21 土井百穀墓碑（どいひゃっこくぼひ）

（高須台1丁目）

百穀は文政11年（1828）己斐村長農家土井彦三郎の子として生まれ[illegible]氏門下で修学した。安政年間（1854～）私塾を設け、和漢の学を授けていた。また別に進脩舎を開設し、イギリス人教師を招き英語を教授した。日彰館を開設し、これが現在の己斐小学校の起こりとなっている。傍らでは[illegible]を設ける等、私財を投じ地方の教育の普及を図った。後に、県会議員となり地方行政にも貢献した功績を讃える顕彰碑が旭山神社遥拝所に建立されている。明治16年没。

### 22 国泰寺（こくたいじ）

（己斐上3丁目）

略縁起　文禄元年（1592）朝鮮出兵の折、豊臣秀吉は安国寺恵瓊と広島霊仙寺で歓談した。文禄3年（1594）恵瓊は朝鮮木を持って帰国。霊仙寺を改築して、臨済宗安国寺とした。関が原合戦後、慶長6年（1601）福島正則が広島入城の際、尾張の雲興寺普照（正則の弟）を招き安国寺を国泰寺と改め曹洞宗とした。福島正則改易後、浅野長晟が広島に入府し、元和8年（1622）普照の隠居後は紀州大専山徹州全宗が招かれ、浅野家菩提寺とした。この寺には、赤穂浪士で有名な大石内蔵助の妻りくの墓が子どもの墓と並び、また寺西織部の寿塔も建立されている。昭和53年（1978）中区中町より己斐に移った。

### 24 滝之観音堂（たきのかんのんどう）

（己斐上5丁目）

略縁起　周囲を深い山と幽玄な谷に囲まれ、流瀑がかかることから、古くから自然の聖地として救世の尊像が祀られ滝の観音と呼ばれていたが、大雨・大風により山が崩れた際、尊容堂宇とともに流失し、滝の観音の名のみ残った。寛永3年（1850）土井半右衛門因親が広島誓願寺より法道仙人真作の聖観音の秘像を迎え、同義俊和尚の入仏供養を営んで、法道山観音院順教寺として再興を果たした。広島新四国八十八ヶ所の第十番霊場である。

## 日本・己斐年表

| | |
|---|---|
| 四五〇年～四七〇年 | 景行天皇、安芸国に佐伯部を置く |
| 六四五年 | 大化の改新 |
| 七一〇年 | 飛鳥浄御原宮より平城京に都を移す |
| 七九四年 | 長岡京より平安京に都を移す |
| 一一九二年 | 源頼朝鎌倉幕府を開く |
| 一三六〇年頃 | 己斐城原型が発生したと推定される |
| 一三三八年 | 足利尊氏室町幕府を開く |
| 一五二五年 | 己斐城主・己斐豊後守師道入道宗端が武田元繁に攻撃されるも、城が堅固であり、撃退する。 |
| 一五五五年 | 厳島の戦いにて毛利氏が陶晴賢を破る<br>毛利元就、松山八幡社に戦勝祈願を行なう |
| 一六〇三年 | 徳川家康江戸幕府を開く |
| 一六七四年 | 寺西織部・己斐加加桑山の岩に「通玄山」を彫る |
| 一七〇四年 | 浄土真宗・法輝山光西寺が僧智境により開山 |
| 一七七一年 | 西本願寺勧学・僧鎧が加茂郡乃美尾村に生まれる |
| 一八二二年 | 吉村斐山・己斐村に生まれる |
| 一八二八年 | 土井百穀・己斐に生まれる |
| 一八五四年 | 吉村古処・己斐に生まれる |
| 一八五六年 | 砂本貞吉・己斐に生まれる |
| 一八七三年 | 土井百穀・己斐に日彰館を開設 |
| 一八七六年 | 日彰館を村立己斐小学校と改称 |
| 一八八三年 | 才崎山に百花園を開設 |
| 一八八五年 | 百花園に千手観音堂・大元稲荷社建立 |
| 一八八六年 | 砂本貞吉・広島女学会創設（現・広島女学院） |
| 一九二一年 | 佐伯郡己斐村が己斐町となる |
| 一九二九年 | 佐伯郡己斐町が広島市己斐町となる |
| 一九四五年 | 大平洋戦争下において<br>広島・長崎に原子爆弾が落とされた |
| 一九七二年 | 広島市立己斐中学校開校 |
| 一九七四年 | 蛇抜山の千手観音堂・大元稲荷社をイトーピア新山に移す |
| 一九七五年 | 広島市立己斐東小学校開校 |
| 一九八〇年 | 政令指定都市広島市西区己斐となる |
| 一九八二年 | 広島市立己斐上小学校開校 |
| 一九八四年 | キリシタン殉教之碑建立 |
| 一九八七年 | 広島市立己斐上中学校開校 |
| 二〇〇一年 | 自動車専用西風トンネル開通 |

発　行：平成17年(2005)9月　企画編集：己斐の歴史研究会　己斐公民館
制　作：広島市西区役所

# 史跡概観コース ①～⑯

約4時間半 全部で

(出発点) JR西広島駅 ― 約5分 ― ①旧国鉄己斐駅原爆碑 ― ②源左衛門橋 ― 入口まで約5分 約15分 上まで ― ③旭山神社 ― 約20分～約30分 ― ④岩原城跡(旭山) ― 約25分 ― ⑤浄修院

― 約20分 ― ⑥勧学僧鎧墓碑 ― 同じ場所 ― ⑦光西寺 ― 約10分 ― ⑧吉村斐山・古處墓碑 ― 約30分 ― ⑨通玄山(岩) ― 登山口まで約20分 約10分 山頂まで ― ⑩平原城跡(茶臼山) ― 約30分 ― ⑪千手観音堂

― ⑪千手観音堂と同じ場所 ― ⑫大元稲荷社 ― 約15分 ― ⑬砂本貞吉墓碑 ― 約15分 ― ⑭植木屋次郎右衛門墓碑 ― 約15分 ― ⑮キリシタン殉教之碑 ― 約15分 ― ⑯滝之観音への道標

## ① 旧国鉄己斐駅原爆碑
(きゅうこくてつこいえきげんばくひ)
(己斐本町1丁目)

爆心地より約2.4km離れた旧国鉄己斐駅舎(現:JR西広島駅)は被爆(1945年8月6日午前8時15分)と同時に全壊したが、わずかに陸橋部分のみが姿を残した。幸いにも列車が発車した直後で、待合室には人は少なく被害も軽く済んだという。この惨状を撮影された川本俊雄氏の写真を銅版に焼き付けて、赤茶色の御影石の頂部を斜めに切り落とした面に埋め込んだ石柱(高さ150cm、幅70cm、奥行き44cm)である。駅前広場西側交番所前の通路の片側で町の雑踏の中、静かにたたずんでいる。

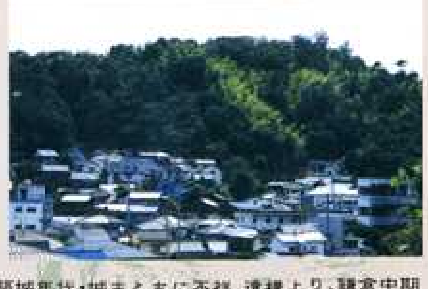
## ② 源左衛門橋
(げんざえもんばし)
(己斐本町3丁目)

名の由来　浅野広島藩主初代長晟公は広島入府後、竹馬の友であった紫竹源左衛門を紀州より呼び寄せ、現在の己斐西町に領地を与えて住まわせた。あるとき、大雨で八幡川が氾濫し、通りかかった大名行列が困窮していたところ、源左衛門が屋敷内より板等の資材を持ち出しにわか造りの渡し橋を架けて行列を渡したことから、この後に出来た橋も源左衛門橋と呼ぶようになったと言われている。

## ③ 旭山神社(旧:松山八幡社)
(あさひやまじんじゃ)
(己斐西町45番)

祭神　宗像三女神、神功皇后、応神天皇
縁起　神功皇后熊襲征伐の折、当地に船を泊め松山(現:旭山)に登られた。神功皇后の子・応神天皇が「八幡太郎」と号された契機に、郡主の許しを得て、「八幡社」を勧請して、氏神とし松山に祀った。天文24年(1555)毛利元就が厳島合戦の折、戦勝祈願に八幡社へ訪れたところ朝日が昇る様が美しく戦勝の気運の高まりを感じ、喜んだことから旭山となった。遥拝所には、土井百穀顕彰碑・上野旭峯彰徳碑・棲本調二翁彰徳碑がある。

## ④ 岩原城跡(ふる城　旭山)
(いわはらじょうあと)
(己斐西町旭山)



築城年代・城主ともに不祥。遺構より、鎌倉中期と推定される。本丸は城郭をなす松山のほぼ中央に位置し、二の丸・帯曲輪・小帯曲輪・堅堀等の遺構が認められる。後に造られた平原城と併せて己斐城と呼ばれた。厳島神社に残る歴史資料の一つ「房顕覚書」によると、永正12年(1515)城主己斐豊後守師道入道宗端は武田元繁勢に包囲されたが城郭が堅固であり、落城しなかったとの記録が残っている。

## ⑤ 浄土真宗木辺派浄修院
(じょうどしんしゅうきべはじょうしゅういん)
(己斐西町2丁目)

開山　釈豊和和尚。大正初年に結成された「仏教済世軍」運動に挺身した豊和和尚は世の仏教離れを嘆き、熱心な信者の願いに応えて己斐へ来た。昭和初期私財を投じて現在の念仏堂を当地に開山した。現在でも、檀家は無く、信者が支えるお寺である。須弥壇に本尊阿弥陀仏、右に聖徳太子絵、左に親鸞上人絵を祀る。念仏の唱和に木魚の伴奏が付随するのは、本院の特徴であろう。山陰の静寂と水の澄む庭園が仏心を生む。

## ⑥ 勧学釈僧鎧之墓碑
(かんがくしゃくそうがいのぼひ)
(己斐中2丁目)

陵水院僧鎧は25歳のころ、僧叡の石泉社塾(呉市長浜付近)にて宗学を学ぶ。天保9年(1838)西本願寺勧学に昇進。後に、善福寺(中区中島町)の14代住職となる。仏学・漢学書の著作多数。引退後、親密であった智梟和尚の光西寺に住み、天保11年(1840)同寺にて入寂、墓所に墓碑が建つ。三業惑乱(寛政年間西本願寺8世蓮如のおふみ「助け給えと頼む」が自力本願か他力本願かの論争のこと)の時代を生きた高僧は今はひっそりと祀られている。

## ⑦ 浄土真宗西本願寺派法輝山光西寺
(じょうどしんしゅうにしほんがんじはほっきざんこうさいじ)
(己斐中2丁目)

開基者は智境和尚。廃寺となっていた教徳坊の跡を宝永年間(1704)再興し、文久2年(1862)本願寺宗門となり、明治12年(1879)光西寺名が許可された。芸藩通志によると「己斐に寺はなし　お堂が2つあり」と記録されているが、この寺が己斐で最も古い寺である。
本堂は明治43年(1910)旧、木挽町の西福寺の建物を移築したものといわれる。
勧学僧鎧が晩年を過ごし、入寂したお寺でもある。

## ⑧ 吉村斐山・古處の墓碑
(よしむらいざん・こしょうのぼひ)
(己斐中3丁目)

吉村斐山は文政5年(1822)に生まれ、吉村秋陽に学ぶ。後に吉村家の娘婿となり、養父の後を継ぎ、三原浅野藩校教授となる。明治になり広島藩校修道館教授。引退後、光西寺近くに寓居し、郷土の子弟を育てる。明治15年没。斐山の子・古處も父の学舎に学び、師範学校を卒業後、小学校・浅野学校で教諭、明治16年広島師範学校教諭を務め、同41年没。
父子ともに教育に携わった先覚者であり、斐山の墓の隣に古處の墓が並ぶ。斐山の墓の裏には一代記が漢文で刻まれている。

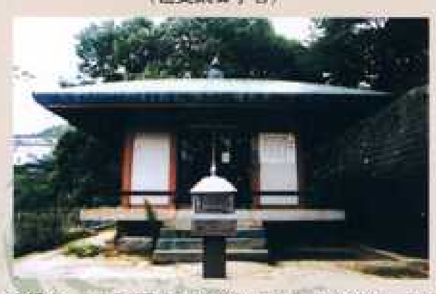
## ⑨ 通玄山(岩)
(つうげんやま(いわ))
(己斐中3丁目)

彫刻した寺西織部信之は浅野長晟の家臣であった父とともに広島に来た。宗家とは別に御小姓となり、後に累進して御年寄役となる。引退して晩年己斐に隠居。かねてより深く禅宗に帰依しており、禅門の師である臨済宗禅林寺和尚虚珊を通じて黄檗宗開祖隠元禅師の直筆「通玄山」の書を得た。「通玄」という言葉には"禅の極地"という意味がある。これを加加森山の巨岩に彫刻した。毅然たる姿は一部補強を要したが昔の面目を保っている。この場所より、安芸灘に夕日の入る様子は誠に美しく、この景勝ゆえにこの地を神聖域と感じたのではないだろうか。

## ⑩ 平原城跡(小茶臼山)
(ひらはらじょうあと)
(己斐上4丁目)

ふる城と呼ばれる岩原城と一対をなす。茶臼山全体を城郭とし、山頂部を本丸、南が大手(玄関に相当)、北が搦手(裏口に相当)、西に二の丸、下段部は東西南北の四隅に城郭が残されている。天文3年(1534)城主己斐豊後守直之(師道の嫡子)は時の武田勢に及ばぬを悟り退散した。この後、鉄砲の普及に伴いこの小さな城では山のふもとからでも攻撃されるため、廃城となったが、現在も堅固なとりでは残っている。

## ⑪ 新山千手観音堂
(しんざんせんじゅかんのんどう)
(己斐東2丁目)



略縁起　毛利輝元公彫刻の千手観音像は、己斐町百花園の慈眼寺に祀られていたが、昭和4年同町字蛇抜に上段に大元稲荷社、下段に観音堂を造営して移された。昭和43年イトーピア造成工事に伴い軍人谷に仮安置されたが、昭和49年5月イトーピア東方新山に観音堂を新築して移された。鎮守神大元稲荷も堂の後方に昔の姿を模して新築された。観音堂境内は広く南西方向に安芸灘を望む。通常は堂の扉は閉じられていて観音像は見ることはできないが、安芸七観音第二番霊場である。開帳日は3月18日である。

## ⑫ 大元稲荷社
(おおもといなりしゃ)
(己斐東2丁目)

祭神　大元稲荷大明神
鎮座の由来　大正14年(1925)千手観音菩薩像が佐伯郡己斐町の百花園普門山慈眼寺に祀られた。このとき鎮護神として大元稲荷社が同地に鎮座された。その後、イトーピア造成に伴い、観音像が蛇抜に動座、更に、軍人谷に仮安置、昭和49年(1974)己斐東2丁目の新山に観音堂が新築移転された。稲荷社も常に動座をともにしており、現在の新山千手観音堂の後背の地に鎮座し、この地の保安と観音堂の鎮守に当たっている。
お社の様式は地辺2m角、頂辺が1.1m角・高さ1.2mの反りのある角錐状の石積み台の上に桁行0.65m、梁間0.5mの社流造りの社屋が東南向きに置かれ、小規模ながら正規様式を備えている。かつては、朱塗りの鳥居が建てられていたが、現在は朽ち果てて柱が一本残っている。

## ⑬ 砂本貞吉墓碑
(すなもとさだきちぼひ)
(己斐東2丁目・蛇抜)

貞吉は己斐村に生まれ、18歳で航海士を志し、海軍に入隊した。航海術の向上を求めて26歳で渡英を計画したが、途中の米国サンフランシスコで牧師ギブソン夫人に出会い、この地で神学と英語を学び、30歳で帰国。以降、キリスト教の布教に尽力し、流川教会の基を築く。また他方で、子女の英語教育に努め、広島女学会を創設。のちに名称を広島女学会→英和女学校→広島女学校とし、現在の広島女学院を創る。全国を布教し、昭和13年東京で病没。

## ⑭ 植木屋(牡丹屋)次郎右衛門の墓碑
(うえきやじろううえもんのぼひ)
(己斐中2丁目・軍人谷)

徳川家康の娘、浅野長晟夫人は牡丹を深く愛した。元和5年(1619)長晟の広島入府の際、牡丹栽培に長じた次郎右衛門をつき従って来た。次郎右衛門は牡丹栽培の適地として己斐を選び、移住した。花卉栽培のほかに、造園・盆栽の創成開発に工夫をこらし成果を得て、これを地元民にも広く普及・定着させ地場産業として発展させた。己斐は植木盆栽の盛んな地として名を馳せ、現在も、三百数十年の伝統を受け継いでいる。

## ⑮ キリシタン殉教之碑
(じゅんきょうのひ)
(己斐東1丁目)

1549年に伝来したキリスト教は広島でも1599年より伝道されていたが、豊臣秀吉の時代に布教を禁じられ、キリスト教の信者は迫害を受けるようになる。広島初伝道より17年後、広島福島藩において初めての殉教者がでた。刑場は山手川(現・太田川放水路)河原でした。刑は磔・斬首・火焙り・穴吊・牢死等凄惨を極めた。
「己斐の歴史研究会」は史績発掘の着手を機にこの殉教の聖地を世に明らかにすべく、有志が結集し、1984年2月慰霊碑を建立した。

## ⑯ 滝之観音への道標
(たきのかんのんへのどうひょう)
(己斐本町1丁目)

滝の観音は霊験あらたかで、大衆の信仰を集めていた。更に広島新四国八十八ヶ所第十番霊場とされ、参詣者は多かったことであろうと推察される。この参詣者の便を図ろうと、某子斎藤兵衛が、旧山陽道から滝の観音への分れ道のすぐ傍に道標(高さ83cm、一辺20cmの四角柱)を建てた。正面には「是ヨリ滝ノ観音江十八丁(2km)」、右側面に「明治二己巳年四月中旬」、左側面には「成善寺世話人某子斎藤兵衛」と彫刻されている。

# オプションコース ⑰～⑳

## ⑳ 長栄山清照寺 西福院(真言宗)淡島大明神
〔己斐西町32-6〕

略縁起　文禄2年(1593)阿波の国　隆誉上人が時の藩主 毛利輝元公より、寺地を拝領し、聖観音を本尊とする西福院を開山した。後、浅野藩主、広島入府(1619)に付随して本院に淡島大明神を併せ祀るようになった。元は中島本町にあったが、昭和20年(1945)原爆により被爆し壊滅したため、諸仏像は焼失した。幸いにも、国の重要文化財指定(1910)の「紺紙金泥宝篋印陀羅尼経(こんしきんでいほうきょういんだらにきょう)」が難を逃れ寺宝として護守されている。第16世勝恵和尚は昭和31年(1956)己斐西町に寺地を得て寺院再建に着手したが、同48年に遷した。第17世伸明和尚が継承し、同49年(1974)に完成した。再建された須弥壇中央に十一面観音、右側に薬師瑠璃光如来、左側に三鬼大権現を祀る。

## ⑱ 瑞雲山善法寺(浄土真宗)
〔己斐本町3丁目〕

略縁起(広島史話伝説第二集抜粋)
弘治2年(1556)第1世恵善和尚が沼田郡阿戸村において臨済宗仏通寺派蓮光庵を開山。
寛永5年(1628)寺号を善法寺と改称し、阿戸村から現在の寺町に移転。元禄年間(1688～1703)「境内非境内」論争が起こり、寺町より、沼田郡楠木村に移転、論争の終結に伴い、寺町に戻る。第4世満法院釈念誓、浄土真宗に改宗。第11代来眼は藪内流の大茶人であったため、藪内紹智の愛用品茶灯篭及びつくばいを受領し、現在も保全している。昭和3年(1928)第13世至道住職が己斐に寺院を建立し、善法寺とした。終戦直後、当山は臨時に軍人遺骨の奉安・伝達所及び被爆死没者の遺骨奉安所として、慰霊していたが、後、遺骨は広島市の慰霊塔に合祀された。
善法寺法宝物・阿弥陀如来木像(飛鳥康雲作)・聖徳太子木像(年代不明　室町時代)。

## ⑰ 別れの茶屋
〔己斐本町3丁目〕

宝暦年間(1751～1763)に出来たといわれるこの茶屋は、草津の港へ通じる道と西国街道へ通じる道との分かれ目にあった「お休み処」。浅野長晟公と竹馬の友源左衛門がお茶を飲んだとの一説も残されているが定かではない。現在はパン屋さんになっているが、手作りの蓬餅やキビ餅が別れの茶屋の名残をとどめている。

## ⑲ 原爆被爆給水(タンク)塔
〔己斐本町3丁目〕

一辺が4m、高さ約10mの赤煉瓦積みの四角形の給水(タンク)塔は工場(軍服製造の麻紡績株式会社)の北西角に位置していたが、給水タンクは原爆風にも耐え、残っていたが後に降ろされた。原爆の灼熱と烈風にも耐え、唯一生き残った給水塔は、今なお健在である。春は蔦の若葉に包まれ緑の塔となり平和の喜びを讃え、秋は紅蓮の炎に身を焼かれるかのように紅葉した蔦の葉に包まれながら、泰然と建っている。この姿に不屈の大和心を汲み取るのか四季を通じて仰ぎ見続けている人もいる。(ガーデンスクェア内)